

技術・家庭科[家庭分野]学習指導案

指導者 浦 上 千 歳

日 時 平成25年11月30日（土）第1校時（10：00～10：50）
年 組 中学校第2学年2組（後半グループ） 計19名（男子8名，女子11名）
場 所 中学校家庭科室
単 元 「日本の衣生活文化を東南アジアに発信しよう」

単元について

衣生活の学習には、①衣に関する科学を学び、科学的な思考方法を身につけて日常生活を合理的なものに改善することができる、②針と糸と布を使ったものづくりの体験により、手指の巧緻性が高まるとともに、ものを創造することの楽しさを味わい、また忍耐の必要性を実感して、精神を豊かに育むことができる、③日本の世界に誇るべき布や衣服・衣装の学習を通してこれらに対する敬意が芽生え、伝統文化を継承発展させようとする気持ちが生まれて、これが日本人としてのアイデンティティに結びつく、という教育的価値が備わっていると考えられる。しかし、現在の衣生活の学習内容を見てみると、日本の織と衣の伝統・文化という観点が希薄である。

本単元では、まずは幕末から明治時代に着用されていた美しい「きもの」の実物に触れさせ、きもの生地の色、施されている刺繍や友禅染を観察させることで、日本の伝統衣装に対する興味・関心を高めたい。さらに、これらのきものに見られる伝統色、中でも、ジャパン・ブルーとして日本人が好んでいる「青系の色」を取り上げて、その群の中心である「藍色」と『藍染め』に着目させる。古今東西引き継がれてきた藍染めについては、その歴史的な学習の中で、日本と世界との文化的なつながりを学ぶことができる教材であると考えられる。また、他国の文化の1つとして、藍染めが現在でも生活の一部となっている東南アジアのモン族を扱う。これにより、他国の文化を理解した上で、さらに自国の文化の素晴らしさに気づき、世界に発信していきたいと思わせることができる内容になる。家庭科での学習を通して、生活環境が大きく変化する中で急速に失われつつある伝統的な衣生活文化を若い世代に伝え、振興する力となってもらい、さらには他国、特に東南アジアへの文化発信の主体になってもらいたいと考えて本単元を設定した。

これまで生徒は、1年生で「衣生活と自立」の領域で『衣服の選択と手入れ』について学んできた。『衣服の選択』では、目的に応じた着用・計画的な活用について、また、『手入れ』では材料や状態に応じた洗濯を中心に学んできた。文化的な内容としては、2年生になって、衣服の構成（和服と洋服の構成の違い）を学んだだけである。また、生徒たちを取り巻く衣生活を見ると、自分で衣服を製作して着用する経験はほぼない。衣服とは、購入するものであり、選ぶ色柄も流行に左右され、誘導されているように感じられる。昨年度の2年生の衣生活の学習において、伝統的・文化的な内容として柿渋染めを扱った内容を取り入れたところ、生徒の衣生活に関する興味・関心が高まり、先に述べた①②が育まれることを実感した。しかし、③の“伝統文化を継承発展させようとする気持ち”を育むまでには至らなかった。

したがって指導に関しては、現在では、ほとんど目にする機会や着用する機会が減ってしまったものに興味・関心を持たせるために、刺繍や染めが優れている幕末から明治期の打掛を実物教材として使用し、日本の伝統文化の素晴らしさを体感させ、古き良きものを見直すとともに日本の色を発見させたい。次に、伝統色、特に庶民の文化として生活の中にあつた藍染めの歴史的な学習を行い、日本と世界の文化的なつながりを学ばせる。その際、他国の文化として、「針と糸の民」と言われるモン族の衣装

・布を取り上げる。東南アジアのモン族の藍染めは、日本の伝統的な藍染めと共通点が多く、日本では先細りになっている衣服における伝統文化を今も生活の中で子孫に受け継いでいる点で、日本の藍染めの学習を深めるものとなると推測される。具体的には、きものの観察から、伝統的な色名を知り、青系の中心である「藍色」から『藍染め』の実習に発展させるとともに、同じように『藍染め』を大切にしているモン族へと視野を広げる。藍染めに加えて、精緻なクロスステッチによる美しい刺繍が施されているモン族の布を観察させ、映像を用いて、モン族の生活状況についても触れさせたい。そして、藍染め布をポケット部分につけた藍色デニム地の絵本用バッグを製作し、手作り絵本を入れて、文化財が不足しているモンの子どもたちに贈ることによって、生徒を主体とした文化発信をさせることを試みる。自国の文化と他国の文化の学習、その学習を生かした実際の活動として絵本用バッグの製作、そして発信の一連の学習を行うことで、時空を越えて、日本の文化を発信することを意図した。

指導目標

1. 日本の伝統色について理解し、日本の“きもの”のもつ伝統文化に誇りを持つことができるようになる
2. 『藍染め』を取り入れた製作品を媒介として、文化発信の意欲をもたせる。

指導計画

- | | | |
|--------------------------|------------|----------|
| 1. キモノ・ビューティー：“伝統の和の色”発見 | ・・・・・・・・・・ | 1 時間（本時） |
| 2. 現代に残る伝統色を染める | ・・・・・・・・・・ | 2 時間 |
| 3. 世界で愛される藍を知る | ・・・・・・・・・・ | 1 時間 |
| 4. 袋と絵本の製作 | ・・・・・・・・・・ | 2 時間 |

本時の目標

日本の伝統色を通して、“きもの”のすばらしさを理解することができる。

「学びのつながり」の視点

家庭科では、生活実践力を高めるために、「文化的な」視点からのアプローチを考えた。Ⅲ期では、“生活を科学的にとらえた実践”として伝統色を扱い、それを取り入れた製作を行う。日本の伝統色、特に現在の生活の中に多くみられる伝統色『藍』は日本だけでなく、世界の各地の人々に古くから愛されてきた色、手法であるという歴史を学ばせ、藍で染めたポケットをつけたバッグの製作を行う。この一連の学習を通して、普段の生活の中でも、日本の古き良き伝統文化を根底とした新たな視点で生活をとらえ直すことができるだろう。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
1. 導入（5分） □身の回りに現在みられる日本の伝統的な衣服について考える （アクティブボード使用）	○和服と呼ばれるものが、儀式的な服装として、現代に残ってきていることを意識させるようにする。
2. 展開（35分）	

なぜ、日本の“きもの”が海外で高く評価されているか？

(1) “きもの”を鑑賞する

□江戸時代（160 年くらい前）のきものであることを知る

(2) 展示会「キモノ・ビューティー」から

□日本の古いきものが、外国に残っている現状を知る

- ・どここの国の衣服か考える
- ・いつの時代のものか考える
- ・どこに残っていたきものか考える
(本物の江戸のきものを鑑賞)

□きものは世界に誇れる日本の伝統的な衣服であることに気づく

(3) 伝統色について

□きものの生地を見て、色探しをする（班活動）

- ・きものに使われている色を書き出してみよう
- ・「日本の色辞典」を活用して色探しをする
- ・きものから見つけた伝統色を 1 つ選び、色の由来をまとめる

3. まとめ（5 分）

□日本のきものが海外で高い評価を受けている理由を考える

□この授業で発見した、“きもの”すばらしさについて、感想を発表する

○現代に見られるきものとの違いに気づくようにする

○本物に触れることで、日本のきものの素晴らしさに気づくようにする。

○ボストン美術館の所蔵品を日本で展示していることを知らせ、なぜ、ボストンにあるのか考えさせるようにする。

○明治期に日本に來日し、日本文化を愛したアメリカ人により収集され、江戸時代のきものが残っていることから、日本のきもの文化の素晴らしさに気づくようにする。

○自分の知っている色名では、表現しきれない色があることに気づくようにする。

○「日本の色辞典」を活用することで、自分の知識では表現しきれなかった色の名前と出会わせるようにする。

○伝統色と呼ばれる現在の生活の中では消えてしまっているすばらしい色名があることに気づくようにする。

○伝統色の色名に、由来があることを知り、日本の色の奥深さに気づくようにする。

◆日本のきものの伝統文化の素晴らしさを理解することができる。

【生活や技術についての知識・理解】

参考文献

- 日下部信幸，仁科幸子．『そだててあそぼう [18] アイの絵本』．社団法人 農山漁村文化協会．2011．
田中優子．『布のちから一江戸から現代へ』．朝日新聞出版．2011．
文部科学省．『中学校学習指導要領解説 技術・家庭』．教育図書．2008．
吉岡幸雄．『日本の色辞典』．紫紅社．2012．
長崎巖．『Kimono Beauty』．株式会社東京美術．2013．